

## 地域情報（県別）

**【岐阜】スタッフに花を持たせることでチームは成長-澤祥幸・岐阜市民病院がん診療局長に聞く**  
**◆Vol.3**

2021年6月11日 (金)配信 m3.com地域版

がん診療において、患者とのコミュニケーションや医療チームとのコミュニケーションはどうあるべきなのだろうか。医師同士の相互評価で選ばれるベストドクターズに選出された岐阜市民病院がん診療局長・澤祥幸氏に、患者・チームとのコミュニケーションのコツや、プライベートでの癒やしだという「花撮り登山」の魅力などについて聞いた。（2021年4月26日インタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回はこちら

▼第2回はこちら



世界肺癌学会で講演する澤祥幸氏（本人提供）

——全ドクターの2%と言われるベストドクターズ（医師やその家族が自分の専門分野の病気にかかった場合、誰に治療を委ねたいかという観点で、医師同士の相互評価で選ばれる）に選出され、どう感じましたか。

今年もベストドクターズに選出していただき、とても感謝しています。「まだまだやるべきことがある」という激励のメッセージだと感じ、身が引き締まる思いです。岐阜大学卒業後に大阪の呼吸器専門病院（大阪府立羽曳野病院、現大阪はびきの医療センター）で勉強した当時最先端の呼吸器診療技術を岐阜市民病院に持ち帰り、一から呼吸器診療体制を立ち上げて長年経験を積んできたことが評価されたのだと思います。また、セミナー登壇やメディア出演などの広報活動に積極的に取り組んできたことも一因ではないでしょうか。今後も患者中心の医療、地域にフィードバックできる医療を目指し、精進していきたいです。

——患者とのコミュニケーションの重要性やポイントについて教えてください。

それまで話すことが苦手だった私が、コミュニケーションスキルの重要性に気づいたのは20年ほど前のこと。アメリカのがん患者支援団体代表のキャロライン・オーディジェとの出会いがきっかけでした。彼女は、実はペリー提督の直系であり、父親を肺がんで亡くした1年後に米国がん研究予防財団を立ち上げたがんアドボカシー活動の第一人者。私にとっては、人生経験においても社会活動においても大きな影響を受け続けている恩師です。

彼女と出会った日、一日中親しく交流したのち私は一つの質問をしました。「日本のがん専門医が身につけるべきものは何でしょうか？」と。彼女は「何よりも身につけてほしいのは、手術の腕でも最先端の知識でもなく、コミュニケーションスキルです」と答えました。この言葉は今も私の心に深く刻まれています。

その後、大阪でがん治療や患者支援活動に取り組むなか、患者とのコミュニケーションが何より重要であり、そのためには相手の思いを引き出す能力、つまり聞き手としての力と、自分を繕わずに思いを言葉にすることが必要だと痛感しました。日本人は、とかく話さないこと、静かであることを上品と考えがちですが、言葉にしなければ思いは伝わらないものです。私は当時大阪に勤務していたので、そこでしゃべりの技術を磨き、自己開示すること、相手の気持ちを引き出すことを身につけました。

今、各学会でもコミュニケーションスキルの重要性が取り上げられ、SPIKES（スパイクス、Setting：環境の設定、Perception：患者の認識の把握、Invitation：患者がどこまで知りたいかの把握、Knowledge：知識や情報提供、Empathy：共感、Strategy：対応策の提示）、SHARE（シェア、Supportive environment：支持的な場の設定、How to deliver the bad news：悪い知らせの伝え方、Additional information：付加的な情報、Reassurance and Emotional support：安心感と情緒のサポート）といった考え方が提唱されています。がん治療における患者とのコミュニケーションスキル教育は、重要な課題の一つだと考えています。

#### ——チームとのコミュニケーションにはどのようなコツがありますか。

医療チームとのコミュニケーションは、患者に対する場合とは異なるポイントがあります。チーム医療では、スタッフの能力を最大限に生かすことがとても重要です。各スタッフがどのようなスキル、武器を持っているのかを把握し、その力を最適な形で引き出すことが成功の鍵となります。

具体的には、スタッフのアイデアや行動に対して「いいね！」と認めること、花を持たせることがチームの成長の第一歩です。チームリーダーは自分を出し過ぎず、スタッフ一人一人を育てることに重きを置くといいでしょう。個人の成長は、チーム全体のレベルアップに直結するからです。このような考え方は、ビジネスリーダーのテクニックとして周知のものですよね。医療でもビジネス界の成功例から参考にできる点は多々あると感じます。他業種の知見を取り入れてみるのも一案です。

#### ——プライベートでのリフレッシュ法について教えてください。

1000～2000メートル級の山に登り、山野草を撮影する「花撮り登山」に凝っています。数年前まで山への興味や関心は皆無だったのですが、ある患者とのやりとりがきっかけで山野草の魅力に開眼しました。

あるとき私の担当する肺がん患者の方が抗がん剤の副作用に苦しみ、かなり落ち込んでいました。その人とたまたま山の話をしたところ、パッと目を輝かせイキイキとした表情になったのです。よく聞くと、日本百名山を夫婦で制覇し、「次はヒマラヤに」と準備していた最中に治療が必要になってしまったと言います。山の魅力について説得され、登山を強く薦められました。「でも、ピッケルとかアイゼンとか持ってないし」と尻込みしていたら、次の週にその方の登山道具一式が私の手元に届いたんですよ（笑）。実際に山に行ってみると想像以上のしんどさでしたが、人目につかない場所にひっそりと咲く山野草の美しさにすっかり心をつかまれました。

それから4年、ときどき山へ行き山野草を撮影するのが私にとって何よりのリフレッシュです。幸運にも岐阜県には山野草が美しく咲く山が多く、「住んでいてよかった」と思わずにはいられません。無名の山々で出会うものと言えばサルやシカだけ、三密とは無縁のロケーションで、コロナ禍の疲れを癒やすのにもぴったりです。

#### ——医療従事者の方にメッセージをお願いします。

医師、医療従事者と言っても、それぞれ専門やポジションはさまざま、人の数だけ進む道があると思います。ぜひ、あなたの道を究めていってください。結果だけがすべてではなく、自分の道を究めるプロセスに大きな意味があると感じます。私自身もまだまだ道半ば。自分の道を一步ずつ進んでいきたいと思っています。



舟伏山のイワザクラ（本人提供）





御嶽山のイワギキョウ (本人提供)



乗鞍岳のコマクサ (本人提供)



鈴鹿岳の福寿草 (本人提供)

※ベストドクターズは、米国および/その他の国におけるBest Doctors,Incの商標です。

◆澤 祥幸 (さわ・としゆき) 氏

1984年岐阜大学医学部卒業。岐阜大学医学部附属病院を経て、大阪府立羽曳野病院（現大阪はびきの医療センター）で呼吸器学、特に肺がんを研修した後、1993年より岐阜市民病院呼吸科医長兼診療科長に就任。2006

年、日本初のがん薬物療法専門医の1人となる。2002年より国際肺癌連盟（Global Lung Cancer Coalition）のボードメンバーとして活動。2011年より岐阜市民病院がん診療局長（がんセンター長）に就任（現職）。2014年より世界肺癌学会アドボカシー委員として国際的な肺がん患者支援活動にも参画している。

【取材・文＝加藤 由起子】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

